第１回学校教育専門委員会　委員意見要旨

平成 25 年 9 月 4 日

① 第６次山形県教育振興計画（仮称）の骨格（素案）について

意見者	意 見 概 要 （ 回答または対応を含む ）
石原委員	**【私立学校の振興】** 　資料４の第６次山形県教育振興計画（仮称）の取組み【イメージ】にも記載されているが、このたび「私立学校の振興」が明確に位置付けられたことに、大変嬉しく思っている。県内の私立学校において、現在、２万２千人の生徒が学んでいるが、これら私立学校関係者を代表して感謝する。
森岡委員	**【各項目の関連性】** 　資料４の関連図について、「地域の教育力の向上」と「郷土に誇りを持ち、地域を愛する心の育成」の両項目は密接なつながりがあるため、双方向の矢印で結ぶのが望ましい。 　また、併せて「キャリア教育・職業教育の充実」についても、同様に地域との関係は深いものがあるため、イメージ上も関連付ける必要があると思われる。
駒林 総務課長 【回答】	資料４の関連図について、委員指摘のように「地域の教育力の向上」と「郷土に誇りを持ち、地域を愛する心の育成」の両項目は関連性がある。今後、具体の内容を作っていく段階において、それを踏まえて検討していく。また、「キャリア教育・職業教育の充実」についても、地域の産業などとの深い関わりがあり、同様に関連付けていく。
後藤(恒) 委員	資料４の関連図は、あくまでイメージであり、このまま６教振に記載されるものではないが、計画の中身を検討する際は、今の意見を十分に踏まえていただきたい。
酒井委員	**【「生命」の継承】** 　前回の第１回検討委員会での協議において、６教振策定にあたっては、５教振そのものを大きく変えていくものではなく、継承していくべきものは継承していくとの意見があった。また、「『いのち』を大切にし、『生命』を継承していく」ということが、これからの子どもたちにとって、とても大事であるとの意見があったが、それをしっかり踏まえた骨格（素案）になっていることを心強く感じた。 　そして、素案第３節(P7)の課題には「５教振から次の時代に引き継ぐ…」とあり、５教振の良さを引き継ぎつつ、新たな課題を含め様々な要素を網羅している。今の山形にとって大事な課題に、これからの 10 年間を見据えて向かっていくという内容になっており、計画の骨格（素案）として良い出来栄えになっていると思う。
出口委員	**【計画の表記】** 　「実践の山形」ということも踏まえ、計画の表記としては「継承する」とか「育てる」などの動詞を使って統一するのが望ましいと考えている。例えば「心の育成」を「心を育てる」というように。その方がイメージや各論についても、入っていきやすいと感じる。

② 学校教育分野に係る検討課題について

意見者	意 見 概 要 （ 回答または対応を含む ）
石原委員	**【教員の配置】** 現状の学校の先生の負担について考える必要がある。教師が本来力を入れるべきなのは学習指導だと思う。ところが、最近、教師が学習指導にとれる時間が非常に少なくなっている。生活指導、家庭・親への対応で時間をとられ学習指導がなかなか思うようにいかない。県の財政のこともあり、十分な教員を配置するのも難しいかもしれないが、人を育てるためには、優秀な人を配置しなければならない。 育てる側と子どもたちの育ちたいという思いをいかにうまくすりあわせていくか、いかに成長させていくかということが大事。今回検討する項目にすべてに関わってくることではあるが、特に特別支援について、小中のうちに、この子に関わる人がもっといればもっと素晴らしい成長を遂げ、高校に入ってからもさらなる成長を遂げて社会に出て行っただろうと思うことが多くあった。そういった子どもたちは、どの子も育ちたいと思っている。その育ちたいという信号を的確にとらえてあげることのできる人の配置は教育を考える時に欠かせないと思う。 是非、人を配置することを惜しまず、できるかぎり多く子どもたちにチャンスを与えられる優秀な教員をできる範囲内でいいので多く配置していただきたい。
大場委員	**【特別支援教育における人の配置】** 石原委員から特別支援教育にもっと人の手をかけて欲しいという意見があったが、保護者からも人手が不足していることについて厳しい意見が寄せられている。学校現場は職員の定数があり、そして加配をいただきながら教育に携わっているが、なかなか一人ひとりの子ども全てに丁寧に手を掛けられない状況である。個別の場面では手が足りないといったことが起こるが、なんとか工夫しながら対応していきたいと思っている。 **【特別支援教育】** ５教振においては、学びを通して自立を目指す中で、支援が必要な子どもたちといった枠の中で取り組んだ。それに対し、６教振の中では、それを一つの項目としてしっかりと取り出し確実に対応するとなっていることにありがたく思っている。平成 19 年度に特別支援教育ということでスタートして７年目になり、今は当たり前の言葉になってきてはいるが、取組みを進める中で新しい課題もどんどん出てきている。これに対応していかなければならない中で、このように取り出して対応いただけることはありがたい。 **【高校教育分野における特別支援教育】** 各論の義務教育の中では丁寧にたくさんの課題、取組みを載せているので、これを精査していくことで、６教振の取り組みが整理されていくのではないか。 幼保小中そして高校と全ての連携の中での特別支援教育と考えると、高校教育においてこそもっと取り組んでいく必要があると感じる。高校教育分野の中でも、文言として特別支援教育の取組みを６教振に載せていただき、連携をもっと深めてい

	ければよいと思う。また、連携を深める部分と高校の中で独自に進めていく部分についても一緒になって頑張っていきたい。
酒井委員	**【いのちの教育（いのちの継承）】** いのちの教育について、高校を卒業するときのことをイメージしてどのように進めるかという説明があったが、高校を卒業するまでに、将来世の中に出て、自分で家庭を持ち、社会で自立をしていくという気持ちを育てる。そういった「いのちの教育」をする必要があると感じている。先ほど、義務教育卒業までにという話もあったが、高校にいかない生徒がいることを考えると中学校段階までに自分が命の継承者であり、自分の命を大事にする、他者の命も大事にする、自分の子どもの命も大事にする。そういうことを是非学習の中で体験等も入れながら感情を育てていくことが非常に大事になってくるだろうと思っている。 特に高校においては進学校においてもそういった時間をきちんと作る。どの生徒もきちんと学んで卒業することを考えていただきたい。 **【学力の問題】** 小学校の校長会の理事会において、今回の学力・学習状況調査の結果について、一人一人の校長がもっと自覚と責任を持って地域・保護者に発信し、ともに新たな学力を育み、子どもたちを指導することが大切だという話し合いが持たれた。 その中で特に小学校だけでなく中学校と密接なつながりを持ちながら、お互いの授業内容・指導方法をさらに強化していく必要があるという話も出ている。 **【コミュニケーション力の向上】** 最近、入学してくる１年生の様子を見ていると非常にコミュニケーション力の不足を感じる。親と子の関わりが非常に薄く、先生に愛情を求めてくる子が多い。親と子の関わりについて、ただ保護者に頑張ってと言っても限界があるので、学校教育の中でそこをどうやって伸ばしていくか、そういったことを日々研究している。 各学校では今、縦割り活動で異学年交流を盛んにしている。これは効果があるといわれており、地域に出かけていって地域の方とのコミュニケーションをとることも行われている。 一番大事なのは日々行われる授業の中でいかに関わりの時間を持つか、友達との関わりの中でコミュニケーション力を高めていくということ。現場に出てその大切さを感じている。 例えば、グループ学習を行うことにより、わからないことをわからないといえる安心感を持ち、友達に自分の意見を聞いてもらうことで友達への信頼感が生じ、自分とは違う意見を聞くことにより思考力が高まり、自分と同じ考えを他の友達の意見として聞いて思考の再構築ができる。また、十分に考え、意見を聞いてもらえた満足感が次の学習への意欲につなげられる。 学習が自分事になって、そこで生じる新たな知恵・意欲・学びたいという気持ちこそが学力を自分で獲得していく力になるのではないか。そして、自尊感情が高まることにつながるのではないかと思っている。

笹原委員	**【時代の変化に応じた授業】** 昭和40年代と今では随分時代が変わり、昭和30、40年代は、単純労働で作った物を売れば収入になり、日本も貿易で黒字になる時代だったが、今は単純労働で物を作ってもなかなか売れない。かなり知恵、工夫が活かされないと物が売れない時代である。 1992年の高卒の求人数が160万人に対し、それから10年後の2002年の高卒の求人数は15万人まで減っている。今の社会は単純なものをつくるだけでは収入を得ることができないことの表れだと思う。このことを考えると私が小学校・中学校で受けてきたような授業では、これからの社会を生き抜く力はなかなか育たない。酒井委員からもあったが、グループ学習などで、お互いが知恵を絞ってレベルの高い課題を解決するような授業が必要だ。そのためには、教師が様々な考えや見方が出てくる教材や資料を準備して、わからなくなったらそこに戻ったり、調べたりして授業を進める。そういう授業が必要だと思っている。是非、授業をどのように変えていくかということを６教振の中に盛り込んでいただきたい。 **【複式学級】** 資料の説明の中で、複式学級に加配等の手当てをしていきたいという話があり嬉しく思った。これまでの複式学級では、１つの学年に先生が教えたら練習問題をさせ、次に別の学年に教えて練習問題をさせる、といった繰り返しを行なっている。ＰＩＳＡ型学力や学力状況調査のＢ問題を解ける力をつけるとなると、子ども同士の考えの交流や知恵の出し合いが必要になるが、それを複式学級でやろうとすると、先生がついていられないので、良い意見があってもそれを深めることや、話し合いの軌道修正をすることができない。複式学級でそういった学力をつけるには加配の手当てが必要となる。是非前向きに検討していただきたい。
柴田委員	**【段階に応じたテーマ・目標づくり】** ６教振は、５教振を踏まえてということであるが、６教振では何が課題になるかを考えたとき、連携・つながり・系統性といったことが１番のテーマになるのではないか。先ほど中井義務教育課長からもあったように、高校卒業の段階でここまでの力を付けておくために、中学校卒業の段階ではここまで、そして小学校卒業まではここまでの力を付けるというような、段階に応じた目標づくり（イメージ）が大切である。 今では多くの学校でインターンシップを実施しているが、中学校の段階で既に職場実習を経験している生徒も多く、高校でやっている内容と重複する場合もある。インターンシップをやるにしても、中学校と高校でのねらいの違いを出さなければならない。それぞれの段階のテーマに応じた流れが重要である。 また、英語の授業についても、小学校ではどの程度までの段階を目指し、中学校ではどこまでを目標にするのかはっきりしなければならない。 いのちの教育にしても、環境教育にしても、小学校、中学校、高等学校それぞれのテーマを明確にすることが課題である。

	【小・中・高の連携】 連携ということでいえば、小・中・高の先生方がそれぞれつなぎの部分を連携していくことによって、お互いの課題を認識していくこともできる。 鶴岡の地域は数学が良いが、これは中高連携をだいぶ前からやっているからではないか。地域を回って数学の教科指導を行っている方から学校ごとの特徴を聞くと、地域性というものがあり、鶴岡では小学校と中学校の基礎の部分の力がしっかりしているとのことである。 小学校から高校までの流れをきちっと作るとともに、小・中・高の連携もしっかりと考えていかなければならない。 【山形県に戻ってくるために】 最後に、県外へ進学した生徒に対して、山形県に帰って来てもらえるようにすることはなかなか難しいが、今では、いろんな企業が入ってきているし、先端生命科学研究所ができたことによって、地元出身の大学卒業者であるとか、様々な技術を持った人材が欲しいといったニーズがあるのではないか。ただ、そういった企業の思いがしっかりと学生に届いていないのではないかと感じる。そこから始められる手立てがあるのではないか。 地元に帰ってくる、あるいは地元を愛する子どもたちを育てるためにも、そこまで考えを広げ、県の施策とも連携させていく必要がある。
武田委員	【三本柱、学校・家庭・地域の関わり】 説明を聞くと、押さえてほしいところは押さえていただけている印象である。 特に、「『いのち』を大切にし、『生命』を継承する」、「郷土に誇りを持ち、地域を愛する心の育成」、「豊かな心と健やかな体の育成」の三本柱は、山形の子どもたちが今持っている良い部分であり、そこを大切にして育てていくという意味で、良い柱になっていると思う。 イメージ図の中で、家庭・地域にはみ出しているところは、学校、家庭、地域が一緒になってやっていくということであると思うが、それをイメージ図の中だけでなく、施策の方にもしっかりと落とし込み、関わりの部分を明確にすることで、家庭や地域がこれを一緒に頑張ればいいんだなという機運が高まっていくことを期待したい。 【少子化問題】 また、10年計画ということを考えると、やはり少子化について気になる。例えば、行く先々で統廃合の話を耳にしても、その地域の悩みとしては出てくるが、10年後、山形県全体の学校現場がどのような状況になっているのかイメージしにくい。 県では、10年後子どもが何人くらいになっていて、統廃合が進むことで学校の数がどのくらいになるのかという予測があるだろうから、その予測から見えてくる課題に対して、先取りした施策をやっていかなければならない。 例えば、統廃合が進み、バスで学校に通っているような生徒がいる地域では、家に帰ったら遊び友達がいないという状況もある。そういったことに対して、子どもたちの居場所を確保するために、例えば学校支援本部を活用するとか、具体的な施

	策をやっていかないと、5年、10年後はあっという間に来てしまう。 　想定できる課題に対してしっかりと施策を打っていけるよう、この計画には期待したい。
千葉委員	**【砂団子やけんかの経験から学ぶこと】** 　幼稚園の立場から見たときに、砂場で遊ぶ子どもの姿が学力調査のＢ問題につながるのではないかと思える。今、砂場で遊べない子が増えてきている。手が汚れるのが嫌というところから始まり、どうやったらあの砂団子の塊ができるのかと試行錯誤して作るというところまでいくのに非常に時間がかかる。それを保護者に伝えてもそういう機会を作ってもらえないので、結局、園任せになり、そこをクリアできないまま小学校にいく。幼保小連携ということで、それを学校に伝えるが学校も忙しいのでなかなか取り組めない。そして、Ｂ問題が苦手というところに行き着いているのでないか。 　また、幼稚園ではけんかを経験するが、その経験をしないままいくと、どれくらいの言葉を言ったら相手が傷つくのか、どれくらいの強さで叩いたら痛いのかということがわからない。それがいじめにつながっていくのかなと思う。 　幼稚園ではたくさんの経験をするが、それを保護者に伝え、そういう経験をしないと社会人になってから大変だということを伝えていかなければならない。そういうことを保護者に伝えたいが、保護者は子どもが二の次になってしまっている。熱が高くても会社から抜けられず迎えに来られない。子育てに十分な時間をとれるような施策が欲しいと思っている。 **【幼保小連携、特別支援】** 　先日、10年目研修の先生方が幼稚園に来てくれた。その時に、幼稚園の教育を初めて目の当たりにしたと言われた。親として見る幼稚園と学習の場として見る幼稚園は違うようなので、できれば中堅の先生方の研修にも幼稚園教育の時間をとっていただきたい。幼保小連携プログラムも紙で書かれたものと実際の現場を見たのを照らし合わせていただければと思っている。 　また、特別な支援を要する子が増えているが、それを認めていただけない保護者が多いので、チーム保育という形で預かっている。療育センター等にお願いする前に、今は教育相談が非常に充実してきているので、それを基に教育相談を受けながら、保護者とともに子どもたちがよりよい教育を受けられるようにしてほしい。
出口委員	**【つながり】** 　継承や引き継ぐという言葉が出ているが具体的に何を繋いでいくのかということをしっかりと考えていく必要がある。一つは幼・小・中・高・特別支援をつないでいかないと学校教育は成り立っていかない。二つ目は、普及・実践の山形の伝統を過去から未来に繋いでいくことがどうしても必要ということ。新しく何かを創っていく必要がある。三つ目は、例えば学力で国語が良いと出ているが、それが算数・数学に結びついていない。学びの内容を繋いでいくという意識をもう一度確認しておく必要がある。四つ目は、社会や地域、自分以外の他者と一人ひとりの子ども達が繋がっているのかもう一度しっかりと捉えて考えていかなければならない。大き

	いものから小さいものへ社会が変わっていく中で、繋がり方という面でコミュニケーション能力が必要になってきている。五つ目は、学校・地域・家庭という繋がりのところで、地域によって事情が違ってきている。大きい地域であれば小学校という単位で考えるが、小さな市町村であれば中学校の単位で考えていかなければならないという意識を持って連携を考えていかなければならない。高校の数も少なくなる。繋がりが弱まっていくことが予想されるので、そこを具体的に考えていかなければならない。 　また、もう一方で、どう戻ってくるのかということを考えておかなければならない。出て行くだけでは地域がおかしくなる。繋ぐということは戻ってくることだという方向性も考えた学校教育の在り方についても考えておく必要がある。 **【教員の育成】** 　６教振の間に、教員の入れ替わりが相当進む。いろんな分野から優秀な若者に教員を目指してほしい。そのためには、優秀な教員を育成するためには、教育が若者にとって魅力あるものでなければならない。自分の子どもを山形で教育したいと思わない限り少子化の問題もなくならない。教育が魅力あるものになるために、学校がその中心となる。
森岡委員	**【先生の子どもとの向き合い方】** 　卒業後の社会人を預かる立場から、一人一人が持っている才能や感性のどこを押していくのかが、社員教育の課題。社員が一瞬、目の輝くポイント（いのち輝く）をどこに見出してやるのかが、私の最大の仕事である。 　後藤委員長の山形新聞の記事に、「やる気与えてくれた先生」とあった。社会でひとかどの人間と言われる多くの方に接して、共通しているのは、恩師と位置づけている先生がいること。均一的な学力向上も大事であるが、子ども達の感性や潜在的な才能をエデュケーションしてあげられるような、先生が子どもと人対人として向き合う機会の創出や位置付けも、教育全体の中で大事なところ。 **【山形の宝キャリア教育支援協議会】** 　平成 25 年度で地域キャリア教育支援協議会が全国で６箇所採択となっている。 このうち、５箇所は教育委員会が主体で実施している。例えば、山形の宝キャリア教育支援協議会というものを組織し、山形の宝である「子ども達、地域の母なる最上川」をテーマとし、最上川との関連で、農業（米、品種改良、紅技術）、工業（山形鋳物技術）、林業（治山、治水技術）、漁業、最上川の舟運や流通・商業などの関連する「しごと」そして、山形の食文化、伝統文化、自然環境教育等など、山形の誇る不易と地域を愛する心、それらを通した勤労観の醸成、未来に誇れる夢のある「しごと」の可能性を体験する場として繋げていくことは出来ないだろうか。 将来、山形で働き生活したいと思う子供の数を増やしていかなければならない。 此処には地域の宝である有能な知識と知恵、経験を持ったあらゆる階層の県民、民間企業のＯＢ、教員のＯＢの方などに参加してもらい、山形県全体で、子供たちと先生方のキャリア教育への取り組みを支援するしくみ、組織ができないだろうか。 青年の家が老朽化しており、そうした施設の一部を改装するなどして、キャリア教育を含む、地域を愛する心であったり、地域、世代との連携であったりと双方向でそれらを

	醸成する課題に取り組んでいく場を創出する必要がある。仮想的（山形の宝キャリア教育支援協議会）キャリア教育のフロント的ホームページを立ち上げ、そこに先生や子ども達がアクセスし、前提の山形の宝についての紹介資料や映像などを閲覧して様々な質問をすることが出来る、会員である業界の専門家や大人が回答する。事前に勉強しそこで興味を持った内容について、上記の施設で幅の広いジャンルの体験学習ができるようにする、企業のインターンシップではさらに具体的な体験学習ができるという仕組みがあれば、先生方もキャリア教育に取組み易いし子供への助言もし易い。我々民間もそれぞれの専門分野について、大きく変化している労働市場の多様化やグローバル化と言った現状を含めて事例紹介や体験学習の場を提供することができる。
後藤（恒） 委員長 【総括】	**【小学校高学年における専科】** 小学校の高学年における専科について是非進めていただきたい。「さんさんプラン」の新目玉になりうるものであるし、インパクトも相当大きいと思う。教員が忙しさに追われるという状況の解消につながり、結果的には学力向上につながっていくのではないか。 算数・数学が弱いという話があるが、残念ながら伝統的に山形県は弱い。なぜそうなのかと考えた時に数学教員の産代・病代を探すのが非常に難しかったことがある。算数・数学の免許を持った先生が非常に少ない。そこが影響しているのではないかと思っている。 また、小学校の授業を見ていて思うのが、非常にまどろっこしいという印象がある。つまり、わかっている子どもは退屈している。これを何とかしないといけない。底辺を引上げるのはもちろん大事だが、上位層も伸ばして行くということも極めて大事。退屈させていたのではもったいない。中学校では目の前に受験という現実な問題があるので実践的な課題もどんどんやらせるということができるので、中学校では回復傾向にあるということがある。ゆったりと育てていただいている小学校の状況が中学校で後伸びする機会を与えていると言えるかもしれないが、改善の余地はあるのではないか。 **【インクルーシブ教育】** 市町村教育委員会の代表として申し上げるが、特別支援教育に関して、国でインクルーシブ教育という考えを出してきたが、これはしっかりとした考えのもとに出してもらわないと、市町村は非常に困る。 特別支援教育、特別支援学校、特別支援学級はわかる。では、インクルーシブ教育はどうかとなったときに、理念はわかるが現実的にどう受けとめればよいのかということ。国も含めて曖昧な部分があると思っているので、慎重に考えていく必要があると思っている。 **【規範意識と読書】** 規範意識の調査結果について 50%というショックな結果がある。これを考えるとき、規範意識と読書とは非常に深い関わりがあると過去の研究が出ている。読書で新しい価値に触れることができる子どもは規範意識が高い。読書を重ねていくというのはこういう面からも有用性があると考えている。

第１回学校教育専門委員会における教育委員意見要旨

平成 25 年 ９ 月 ４ 日

意見者	意 見 概 要 （ 回答または対応を含む ）
小嶋 教育委員	**【地域を愛する心の育成と大人の役割】** 今回示された中では、特に郷土に誇りを持ち地域を愛する心の育成の部分を日々感じている。地元をよく教える、地元をよく知るということが生きていく上でとても大事なことだと思っている。特に、小さい子どもからある程度の年齢までは、輝くもの、すばらしいものについて教える必要があるのではないか。自分の生まれ育っているところがこんなに素晴らしいところで、自分達が生まれ育ったこの地域で同じように育って世界に羽ばたいていったり、地元で活躍した人がいるということが、もう少し多くあってもいいのかと思っていた。そこを今回の計画で示されているようなので、ぜひ取り組んでいただきたい。 生きていく上で自分がどう生きるかというモデルのようなものを大人が示してやるというのが大事。ある程度育ってから自分で判断して選ぶのは本人だが、そこまでは、先ほどの読書もそうだが、多くの知識を与えて、その中で自分で自分の生きる道を探せるような子どもに育てるというのが大人の役割だと思っている。
松村 教育委員	**【子どもにとっての魅力】** 委員の方の情熱あふれる意見、言葉を聞かせていただいた中で、魅力という言葉が印象に残った。子ども達が惹かれるものとは、先生方が魅力的であったり母親が魅力的であったり、地域で頑張る実業家が魅力的であったり、山形県が魅力的であったりというもの。そういうものを感じられるように、まずは私たちがそういう生き方をしていくことが大事ではないか。そういうことを学校教育の中で子ども達が感じることができるような環境にすること。山形県全体がそういう方向に向いて行くことが大事なのではないか。 一人の子どもが一人の魅力的な先生と出会って５分間話をした。そのことで、その子どもの考え方が全く変わり、人生の岐路になったというようなことをよく聞く。先生方は素晴らしい教育への情熱を持っているが、それが子ども達にどのように伝わっていくか、また、それを子ども達が感じていくことができるかということが大切ではないか。 **【家庭教育】** また、家庭教育というものをもう一度見直していかなければいけない。学校と家庭がどのようなつながり方をすればいいのかといったところがこれからもっと重要になってくる。このように社会が激変してくると家庭教育はますます難しくなり、共稼ぎが増え、核家族、シングルマザー・ファーザーが増えてくる。そのような家庭で育った子ども達をいかにハングリー精神を持たせ力強く育てていくか、そのために山形県がどのような教育をしていくのかということはこれからしっかり考えていかないといけない。

	【コミュニケーション能力】 コミュニケーションについても大事なことである。子どもたちや私たちがいろんな価値観・考え方を認め、その中から選択していくという力を身につけていかないとこれからの国際化社会に太刀打ちできないのではないかと感じている。
長南 教育委員長	【「かかわり」から「つながり」へ】 ５教振の議論の時に話題となったキーワードに「かかわり」があった。この「かかわり」が「つながり」に発展したのだなと思った。委員の意見の多くに、つながるという言葉が出てきた。６教振では、つながるということを考えていけば、うまく回っていくと思う。県、市町村、学校、保護者の段階ということも含め、そういう書き方で良いのではないか。 次は文章を示す段階になるが、人の気持ちを興すような表現でなければならない。読んでわかる文書は、使われている用語が測定可能な用語なのかということが非常に大事である。10 年後、文章になっていた用語が測定可能であったのか、測定可能でない日本語は計画には向かない用語である。事務局が書いていくとき、気持ちや意思が高まる、「興る」という文書の書き方をしていく必要がある。うまい人の文章をみると、使われている用語、表現の仕方が限定的である。